

# 後期中等教育における職業教育の現状と課題 ——工業系高校生の進路意識と学校生活調査から

水谷史男

## 1. はじめに

本稿では、現在の高等学校における職業教育と就職・進路状況の問題を、日本社会の構造変化のひとつの焦点として検討するために、高校生自身の学校生活と進路意識をテーマとして行った調査データを手がかりに考察する。この調査は、従来卒業生が工業分野の職業に就職していたとみられる、地方都市にある3つの工業高校を選んで実施したものである。「高校生の進路意識と学校生活に関する調査」として2003年秋にわれわれが実施した調査は、それぞれの学校で進路を決める時期にさしかかる高校2年生に、質問紙記入を依頼したアンケート調査である。

とくに工業系の高校を選んでいるのは、高度経済成長期に製造業中心に大量に必要とされた質の良い技術系労働者の供給源として、高卒就職の日本のシステム、いわゆる「一人一社制」「学校推薦制」などの、高校と企業が連繋して生徒の就職先を決定する「実績関係」のシステムの原型を形作ったのが、工業系の高等学校だったと考えるからである。

1980年代までの日本の高卒就職システムを研究した荻谷剛彦は、ノン・エリートの人材クレンジックな選抜と労働意欲の形成に関して、市場原理に任せ学校が関与しない欧米諸国の後期中等教育よりも、日本の方が比較優位にあると指摘した(荻谷1991)。そこでは、学校と求人企業の長期の信頼をもとに安定した結びつき

が形成され、生徒の就職決定を学校教育内部で面倒を見る「実績関係」が維持され、地域内あるいは地域外の雇用と企業に直結してきた。そこには市場原理ではなくむしろ教育の論理が主導する慣行が成立しており、結果的に効率的で合理的な職業選択と高い労働意欲の実現をもたらす、と考えられていた<sup>(1)</sup>。しかし、1990年代からの長く続いた不況と雇用の縮小は、このような高卒就職システムを維持していくことを困難にし、いまや危機ともいえる転換点にきていることは、ここ数年の間に多くの指摘がある(たとえば安田2004、荻谷2001ほか)。

現在の高卒就職をめぐる困難な状況は、短期的には新卒労働市場全体の収縮と日本の産業構造そのものの変動を契機にしている。しかし、それ以上に重要なのは、戦後築きあげられた学校教育システムの基本構造が、職業と学校とを結びつける回路にとってプラスからマイナスの機能に転換しつつあり、変化に対応できなくなっているということである。とくに1990年代以降、高校卒業時の就職を前提に組み立てられた職業系高校に、その問題が集中的に出てきた。われわれが想定する仮説にたってラフな枠組みを示せば、やや大風呂敷ではあるが以下のような3つの点に当面集約できるだろう。

1) 学校社会の外部化と社会階層・移動の問題

製造業の縮小にみられる産業構造の(もはや

サービス経済化ともいえない) 転換によって、人材配分あるいは社会移動のチャンネルとしての学校教育が、意欲のある子どももない子どもも包括して大部分を巻き込んでいた状態、つまり子どもが将来生きていく社会を見通す際の基礎的枠組み、意識のインフラストラクチャーを提供していた学校社会が崩れようとしている。

しかし、それは「脱学校社会」、つまり学校の外に有効な教育機会を求める、たとえばかつての徒弟制度や開放的な資格制度、あるいは社会教育・生涯教育の方向にではなく、いまのところ下層部分の出口のない学校への滞留、そして親への依存の方向が強まっているのではないか。

### 2) 後期中等教育における職業教育と教養教育の関係の問題

従来問題とされた「普農工商」の課程格差や、公私立の学校格差よりも、高等教育への進学を誘導した教科教育の中身である教養教育そのものが問題化しているのではないか。その結果、複線化の手直しとしての総合高校、単位制高校などへの転換が、底辺の救済にしかになっていない。言い換えれば、特定の仕事を見据えた職業教育は戦後の学校教育の中では一貫してまともに位置づけられ取り組みされたことはなかったのではないか。

### 3) ライフプランの不確実性の増大の問題

高卒段階の就職希望者が、みずからの職業生活と将来展望を描けない状態にあるとすれば、それは自己決定を先送りする罫、に陥って進学に向かう転換している可能性がある。自発的失業ではなく学校や家族が10年先の人生カリキュラムを用意できないために一時避難的に進学を選択し続けている潜在的失業の形態かもしれない。この点は、若年層の価値意識の問題でもあるので、学校教育が提供する情報や文化と、対抗文化としての若者メディアなどの分析が必要になるだろう。

しかし、今のところこれらの仮説は実証データによって確かめられているわけではない。そして、われわれの調査もこれらの仮説をいま直接問うことはしていない。いわば、まだ準備段階のものに過ぎないが、課題設定は本稿でももう少し詰めておきたい。

SSM 調査データをもとに進められた日本の社会階層研究では、学歴による地位達成分析や、社会移動の開放性などが実証的に問われてきたが、近年は不平等や格差が新たな様相のもとに語られるようになった。たとえば先の刈谷の言う「意欲格差社会」(刈谷2001)あるいは山田昌弘の「希望格差社会」(山田2004)という造語が登場している。前者の「格差」とは、主に中等教育段階の学校教育内における学習意欲の格差が層として拡大する可能性を指摘し、後者の「格差」はもっと広く若者一般の就業・結婚のチャンスや将来展望の格差を問題にしている<sup>(2)</sup>。しかし、ここではいきなり格差を言う前に、若者の意欲や希望を鼓舞していたはずの、学校教育のインセンティブがどのような変質を遂げているのかを実際の調査データによって分析を試みたい。調査結果を見る前に、この問題をめぐる歴史的背景の中で、学校制度と職業教育の変遷をざっと確認しておこう。

## 2. 戦後学校教育における高等学校の位置づけ

「教育改革」という言葉はしばしば安易な政策上のスローガンとして使われるが、その内容は時代ごとにより違っている。現在は2002年から導入された公立学校の「教育改革」、いわゆる「ゆとり教育」と一括される制度変更のことを指す場合が多いが、これが実施数年を経ずしてまた見直しの方向に流れていることは、それが真に「改革」であったのかどうかを疑わせるに十分である。しかし、ここに至るまでの経緯は長く、1980年代半ばに設置された臨時教育審議

会（臨教審）以来、とにかく改革が必要だという認識は浸透して、これを「第三の教育改革」と呼ぶ論者も多かった。

「第三」である含意は、明治初年代の学制創設を「第一」、敗戦後数年の学制大改革を「第二」と呼んで、これに匹敵する大改革を構想するところからきている。なぜそれが必要か、どのような方向の改革なのかという点については、天野郁夫が1995年に要約的に述べている3点がわかりやすい（天野1995）。

その要点の第1は、日本社会の政治や経済の大変動（大成長とその危機）に学校教育がインフラとして対応できなくなっている。そしてこれに対する改革の方向は「自由化」と「個性化」である。第2は、学校というフォーマルな教育システムが、家庭や地域、企業などのインフォーマルな教育を吸収してきたが、もう学校教育の発展は頭打ちになり、生涯学習などのインフォーマルな教育に役割の一部を譲ることを考えた方がよい。第3は、学校教育や教育行政の内部で、重心が義務教育から義務後教育へ、つまり小中学校から高等学校や大学へと教育の課題が移行したことにより、中央統制的な文部省自身が「自由化」「個性化」を唱えて「規制緩和」に向うこと、であった。

この時点で「教育の論理」の内部では、「自由化」「個性化」の方向で改革すべき教育システムとは、字義上端的に言えば「窮屈で画一的」な「創造性に欠けた」教育である。具体的には教育内容の細部まで制約する学習指導要領であり、人事予算を硬直させる学校運営方式であり、入試制度に引っ張られた試験と点数至上主義の知育偏重であると言われていた。しかし、そのような現状認識は正しかったのか？その延長線上に展開された教育改革は成功したのか？

社会階層論的視点から教育を見るならば、日本社会における学校教育システムがこれまで果

たしてきた主要な機能は、教育学者が強調する人格や教養形成といった教育の内容よりも人材選抜、人的資源の効率的配分であり、さらにいえばそれが機能していたがゆえに、人々の意欲、とくに若者のアスピレーションを不断に喚起し親世代を乗り越える社会移動をある程度可能にしていたところにあると言わなければならない。しかし、経済成長が止まり学歴インフレが進行し、学校教育が若者に予測可能な未来を提供できなくなると、人材配分と納得のシステムが行き詰ってしまう。それが現在の問題だとすれば、「第三の教育改革」が目指した「自由化」「個性化」とは、教育される側から見たとき、教育への不安と不信を増大させるものでしかなかったのではないか。

いまや教育基本法改訂や6・3・3制大幅見直しまでが提起されている現在の日本の教育システムのどこに問題があり、いかなる理由で制度改革が必要なのか。今一度歴史的に検討される必要がある。それは一見迂遠な作業かもしれないが、1947年GHQ占領政策の一環として提起され、戦後改革の柱のひとつとして実現した「教育基本法」と「学校教育法」による新しい教育システム、いわゆる戦後新制教育の達成した成果、そしてその変質と破綻をどう考えるかという処に戻って考えなければならない。

日本のいわゆる戦後教育の学校教育制度は、現在も1947年の「教育基本法」と「学校教育法」によって基礎的に据えられた枠組みに乗っている。占領統治というこの時点の学校教育に期待された課題の中心は日本社会の「民主化」にあり、それは戦前の初等教育における臣民教育と高等教育におけるエリート養成という構造を、基本的に改変刷新するものであった。両法の公布にともない同年4月発足の新制高等学校については総合制・小学区制・男女共学制のいわゆる「高校3原則」による、すべての中学校卒業

者に等しく開放された教育の機会均等を制度的に実現しようとしていた。

ここで注意したいのは、新制高校の教科課程は1947年4月の通達によれば、高等普通教育を主とする課程と実業を主とする課程に大別され、さらに前者は大学進学準備課程と職業人準備課程とに分けられていた。これにより、旧制の中学校、高等学校、師範学校、高等女学校等、複線化していた学校制度は廃止され、義務教育となった新制中学に続き、一本化した新制高等学校が発足したわけであるが、その当初から高等教育に進学する普通教育と卒業後すぐ職業生活に入る専門教育（職業教育・実業教育）が区別され、しかもそれを「併せ施す」ことが本旨であるとされていた。学校教育法は高等学校の目的を「高等普通教育及び専門教育を施すこと」と規定している。

これにより普通教育を主とする課程において実業が課せられることになったが、これはまだ農業などの従事者が多く工業も中小規模の工場を想定していた当時としては無理もない。たとえば1950年には高校卒業生の69.7%は進学しないという状況であり、1949年の学科課程別生徒数の比率は普通科が64.7%にたいして農工商の課程はそれぞれ10%前後にとどまっていたことをみても、新制高校が当時の地域社会の中堅指導層への教養教育を想定していたようにみえる。この時代の工業系高校の教育については、中小企業の初級技術者や技能者養成を前提に、産業教育および理科教育の充実整備が謳われていた<sup>(3)</sup>。

つまり前記「高校3原則」というのは、(1)1つの高校内に普通課程、職業課程などのいくつかの課程をおく総合型を基本とすること、(2)男女共学とすること、(3)小学区制とすることであったが、男女共学以外はその後後退していく結果となった。一本化された新制高校制度の3原則

は、学校間の格差や差別を生まないために工夫されたといわれるが、進学率の上昇とともに小学区制から大学区制へ、また総合型から職業高校の分離など、理念とは逆の方向に変質していった。その変質を促した大きな力は、経済復興から経済成長にいたる工業化の進展であり、産業界からの第2次産業の現場を支える中堅労働力養成への期待であった。その第一歩は、1961年6月の「学校教育法」に工業・商船に関する学科を置く高等専門学校の追加であった。

### 3. 焦点としての工業系高等学校

さらに1960代に入ると、ベビーブーム世代が高校に押し寄せ、1960年末高校の学習指導要領が全面的に改訂された直後、池田内閣は国民所得増進計画に基づく長期教育計画で、工業教育を中心とする高校教育の再編成を促した。同計画では60年から67年までに工業に関する学科定員を全日制81,000人、定時制4,000人に増やし、高校の教育予算は1959年の810億円から1970年には4791億円と5.9倍の伸びを示し、生徒数も1.3倍に増加した。とくに工業課程の増加は著しく1.8倍、ついで商業・普通課程がともに1.3倍となった。

このようにその後の高校再編成の焦点となったのは工業課程であり、1960年代の高度経済成長を担った第2次産業大手工場労働者の基幹部分の多くを、工業高校の卒業生が占めていった。同時に、これが高卒就職の日本的システムである学校と企業の実績と信頼にもとづいた継続的關係を強化していった。注意したいのは、このような流れの中で普通科と職業課程の分離、複線化が進められたが、工業分野については戦前の実業教育に復帰したわけではなく、教養教育の重視は維持されたことである。

中野育男は、職業高校の総合制から単独制への移行が、「普通教育と結合し、その基礎の上

に立って広い視野から職業教育を振興しようと企図したはずの新制高校の総合制が、現実にはかえって、職業教育のための施設・設備及び教員を分散させ、普通教育偏重、職業教育軽視の傾向を助長する結果をもたらした結果、「新制高校における職業教育も、職業教育・訓練の視点から見ると、戦前の「実業教育」からは大きく後退した。新学校制度は従来からの実業教育の体制を著しく破壊したばかりでなく、実質的には産業教育の方向を逆にまったく台無しにしてしまった」と論じている（中野2002）<sup>(4)</sup>。この点は、戦前の実業教育と戦後の職業教育の中身について具体的に検討する必要がある、特定地域の産業や企業と強く関連していた実業学校の教育と、戦後の広範にして標準化された職業教育を単純に比較することはできない。

ただ、高度経済成長期の日本の製造業が高い生産性を実現したことは疑いなく、その基幹部分の労働者が主として高卒労働力であったことは確かだから、公教育の中身が実業教育として不十分なものであったとしても、企業内教育やOJTによって十分補えるものであったという説も立てられる。少なくとも、結果的には失敗したとはいえない。問題はむしろ、教養教育が高等教育への進学・入試の手段となり、学力競争が同世代を広く巻き込んでいったことで、相対的に学力の低い層が、職業系の高校に集まってくる傾向が強まったことである。いわゆる普農工商の課程間格差が、学習と学校生活への意欲を低下させる学校が目立つようになる。

高校への進学率が95%を越え、高校中退者の増加や不登校、いじめなどの問題が顕在化した1980年代後半に高校制度の手直しを迫られた政府は、従来中卒勤労者の高校段階の教育機会に対応した通信制と定時制高校の生徒数が大幅に低下したことを受けて、1988年に単位制高校を制度化し93年には全日制にも拡大する。これは、

学年別に教育課程を区分せず、卒業までにきめられた単位をとれば卒業が認められるという制度で、高校中退者への対応を主な動機としている。さらに同じく93年に高校設置基準を改訂して、従来の普通課程と職業課程の区分をもたない学科、総合学科を制度化した。これは、いわゆる普通高校と職業高校に区分されている高校のあり方（格差）を是正するという意図があり、「生徒の個性にあった学習」ができるように選択科目の幅を広げたものである。この結果、2000年度までに設置された総合学科は全国で145校、単位制高校は332校（うち全日制課程は179校）となった。

学校基本調査によれば、全国の高等学校の学校数は2000年度（平成12）で5478校、中学校卒業生の高校進学率は97.0%、在学生徒数は416万5434名、高校卒業生の大学および短期大学進学率は45.1%である（平成12年度「学校基本調査報告書」）。第2次ベビーブーム世代が高等教育を通り過ぎた1990年代まで、大学・短大の進学率は伸び続けたが、その後も基本的には高等教育進学率は低下するには至っていない。

ただ、少子化の進行で若年層の総人口自体が低下してくるので、進学率が下がらないということは単純に言えば高卒就職者率がどんどん低下していく結果になる。大学定員や大学数が大きく減少しない限り、この傾向は変わらない。実際、かつては卒業生の大半が就職していた工業高校や商業高校が、軒並み就職を選ぶ生徒が減少し、卒業生の進路別内訳として公表される数字では、進学者の比率が半数を超えるようになっている。しかし、進学者の多くは4年制大学や短大ではなく、多くは各種の専門学校への進学者である。このような傾向はこの数年顕著になっている。

同世代人口の半数が高等教育を受ける高学歴社会は、ある意味で日本の戦後教育システムが

表1 高校卒業後の状況 (1991/2001年)

学校基本調査

	卒業生数		短大・大学志願率		短大・大学進学率		専修学校等進学率	
	男	女	男%	女%	男%	女%	男	女
全国91	897,469	905,752	51.4	49	24.6	38.7	36.1	23.3
山形県91	8,368	8,393	33.4	33.1	20.8	27.8	24.3	23
茨城県91	21,633	22,272	43.1	44.5	18.1	33.3	39.6	24.8
東京都91	81,943	90,172	62.6	58.5	25.1	41.2	45.4	30.2
沖縄県91	9,377	10,147	37.7	43.4	12.9	25.3	31.6	30.6
全国2001	660,007	666,837	57.3	54.5	43.1	47.1	27.5	26.4
山形県01	7,069	7,090	41	43.1	34.5	37.2	25.4	30.2
茨城県01	16,937	16,724	54	53.1	40.9	45.7	28.7	25.5
東京都01	55,309	58,747	70	68.5	47.9	57	29.5	24
沖縄県01	8,312	8,822	40.7	44.2	28.1	33.9	25.6	28.2

目指したことの実現であるといってもいい。多くの国で高等教育はエリートのためのものであり、戦前の日本も旧制高校以上の学校は、基本的には国家主導の近代化の指導層を養成する役割を担っていた。これに対し複線化していた学校教育の中で、職業教育を中心とした実業系の学校は、産業を支える熟練労働者の入口であったと考えられる。そして、義務教育だけで社会に出て行く多数派の子どもには、体系的な教養も技能も身につける機会はなかった。戦後の教育が終始気を配っていたことは、このような学校教育システムによって明確な職業上の階級格差が顕在化することを無効にすることだった。1960年代の「高校全入」運動にみられるように、すべての子どもが高い水準の教育を受けられることが理想である、という考えは、社会移動のチャンスがあまねく与えられると信じる限り、国民各層に希望を与え続けるし、親は子への教育投資を可能な限り続けることになった。

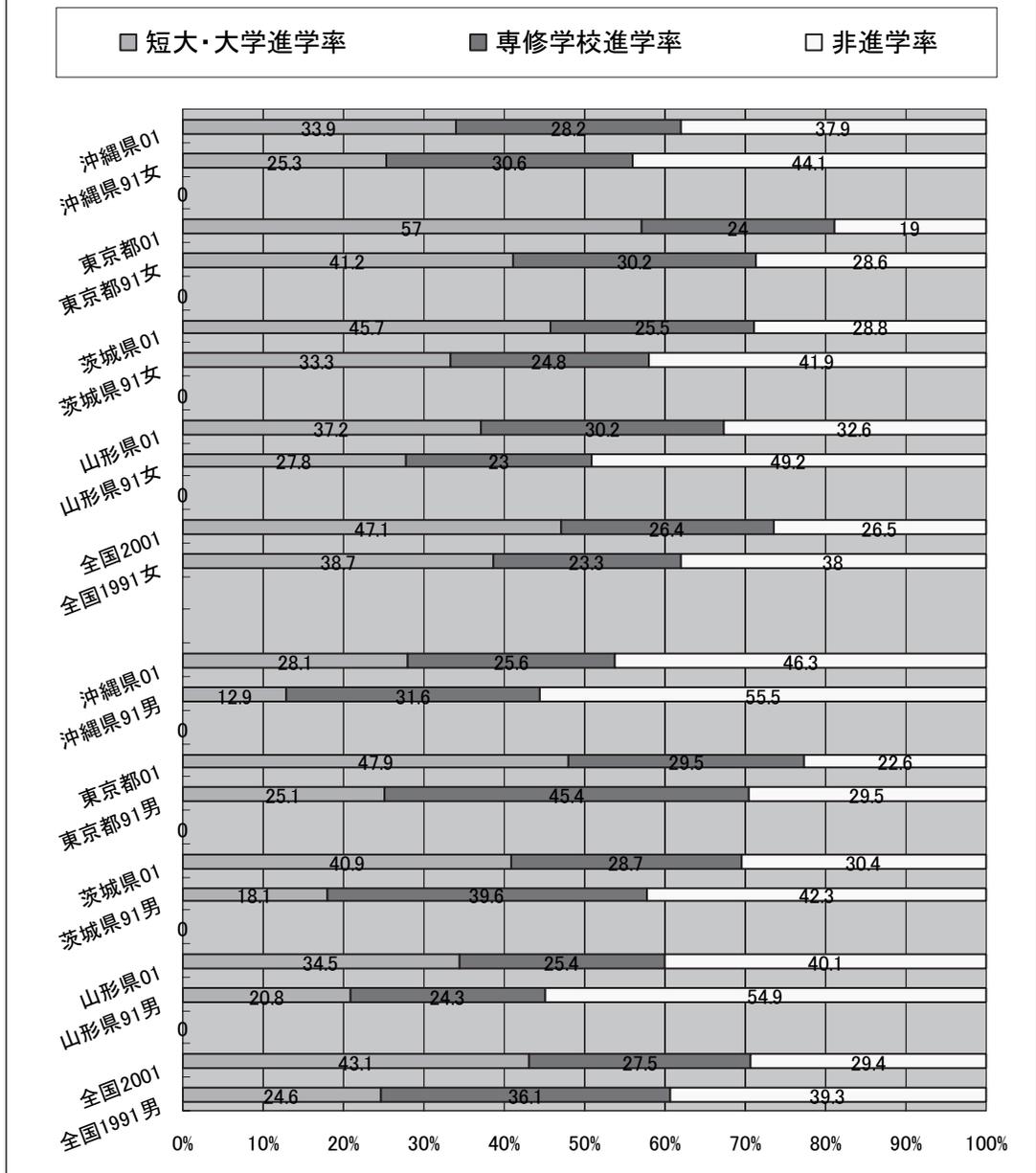
現在の状況は、2001年の数字で言えば15～19歳人口131万人のおよそ70%以上が学校に行っ

ていて、アルバイトなどという形で就労はしていても、定職についていない。この年齢層の失業率は12%を超えている。2002年の高卒就職者は約22万人、就職者率は17%、就職しない無業者が約14万人、卒業生の11%いる。これは全高校をあわせた数字だから、普通科とそれ以外では就職者率は差があるが、工業高校もこの傾向の例外ではない。

ただ、高卒者の進路を都道府県別にみると地域による差がかなりあることがわかる。具体的にこの状況をみるために、表1では1991年と10年後の2001年の山形県、茨城県、東京都そして沖縄県の高卒卒業生の大学・短大志願率、進学率、専修学校等進学率を示してある。

1991年には、全国で短大・大学への志願率と進学率はそれぞれ男子で51.4%、24.6%、女子で49.0%、38.7%であった。それが、10年後の2001年では、男子57.3%、43.1%、女子54.5%、47.1%と変化した。いずれも10年で比率を高めているが、地域差がある。東京都と沖縄県を比べると、東京では2001年で志願率と進学率は、

図1 高卒者の進路状況(1991/2001) 学校基本調査



男子70.0%、47.9%、女子68.5%、57.0%とほぼ半数が進学しているが、沖縄県では2001年で同じく、男子40.7%、28.1%、女子44.2%、33.9%で、男子で4人に1人、女子で3人に1人くら

いが高等教育に進学するに留まる。また図1は、同様に沖縄県、東京都、茨城県、山形県の高卒者の進路状況を1991年と2001年で比較したものである。いずれも10年で進学率が伸び、なかで

表 2 茨城県内県立高校（全日制）の内訳 上段：生徒数 下段：構成比 2003 年度

	普通	工業	商業	農業	水産	その他	計
第 1 学区（日立・県北部）	7,653[12] 80.0%	889[2] 9.3%	800[2] 8.4%	-	117[1] 1.2%	227[2] 2.3%	9,569[15] 100%
第 2 学区（水戸・県中央）	10,640[20] 67.0%	1,917[3] 12.1%	1,630[3] 10.3%	1,020[2] 6.4%	363[1] 2.3%	318[2] 2.0%	15,888[27] 100%
第 3 学区（鉾田・潮来・県東）	5,631[9] 74.8%	1,070[2] 14.2%	218[1] 2.9%	374[1] 5.0%	-	234[2] 3.1%	7,527[11] 100%
第 4 学区（土浦・取手・県南）	12,502[21] 76.6%	1,156[3] 7.1%	1,480[4] 9.1%	351[2] 2.1%	-	832[5] 5.1%	16,321[23] 100%
第 5 学区（古河・県西部）	16,769[29] 76.5%	1,878[3] 8.6%	1,511[3] 6.9%	500[2] 2.3%	-	1,271[7] 5.8%	21,929[34] 100%
県立高校総計	53,195[91] 74.7%	6,910[13] 9.7%	5,639[13] 7.9%	2,245[7] 3.2%	363[2] 0.5%	2,882[18] 4.0%	71,234[110] 100%

生徒数〔 〕内は設置校数、複数学科併設校があるため合計は一致しない。

「その他」には家庭、厚生、福祉、国際、理数、音楽、美術および総合学科などを含む。

表 3 A 高校教育課程編成表

<p><b>*機械科・・・</b></p> <p>〔1年〕普通教育（国語総合・地理A・数学Ⅰ・理科総合A・体育・保健・英語Ⅰ・家庭基礎） 工業科目（工業技術基礎・製図・情報技術基礎・機械工作）普通19単位工業10単位</p> <p>〔2年〕普通教育（国語総合・世界史A・現代社会・数学Ⅱ・物理Ⅰ・体育・オーラルコミュニケーションⅠ） 工業科目（実習・製図・機械工作・機械設計・電気基礎）普通18単位工業11単位</p> <p>〔3年〕普通教育（現代文・現代社会・数学Ⅲ・数学A・体育・書道・英語Ⅱ） 工業科目（課題研究・実習・製図・機械設計・原動機）普通16単位工業13単位</p> <p>受験できる資格：二級ボイラー技士、第二種電気工事士、ガス溶接技能講習、日商ワープロ検定、小型車両系建設機械、危険物取扱主任者乙種、基本情報技術者、機械製図検定、情報技術検定、パソコン検定。</p>
<p><b>*電気科・・・</b></p> <p>〔1年〕普通教育（国語総合・地理A・数学Ⅰ・理科総合A・体育・保健・英語Ⅰ・家庭基礎） 工業科目（工業技術基礎・情報技術基礎・電気基礎）普通19単位工業10単位</p> <p>〔2年〕普通教育（国語総合・世界史A・現代社会・数学Ⅱ・物理Ⅰ・体育・オーラルコミュニケーションⅠ） 工業科目（実習・電気基礎・電気機器・電力技術・電子技術）普通18単位工業11単位</p> <p>〔3年〕普通教育（現代文・現代社会・数学Ⅲ・数学A・体育・書道・英語Ⅱ） 工業科目（課題研究・実習・製図・電気基礎・電力技術）普通16単位工業13単位</p> <p>受験できる資格：ボイラー技士、危険物取扱主任者乙種、第一種電気工事士、第二種電気工事士、デジタル・アナログ工事担任者、第三種電気主任技術者、基本情報技術者。</p>
<p><b>*情報電子科・・・</b></p> <p>〔1年〕普通教育（国語総合・地理A・数学Ⅰ・理科総合A・体育・保健・英語Ⅰ・家庭基礎） 工業科目（工業技術基礎・情報技術基礎・電気基礎・ハードウェア技術）普通19単位工業10単位</p> <p>〔2年〕普通教育（国語総合・世界史A・現代社会・数学Ⅱ・物理Ⅰ・体育・オーラルコミュニケーションⅠ） 工業科目（実習・電気基礎・電子回路・プログラミング技術）普通18単位工業11単位</p> <p>〔3年〕普通教育（現代文・現代社会・数学Ⅲ・数学A・体育・書道・英語Ⅱ） 工業科目（課題研究・実習・製図・通信技術・ソフトウェア技術・マルチメディア技術）普通16単位工業13単位</p> <p>受験できる資格：基本情報技術者、初級システムアドミニストラータ、アナログ及びデジタル工事担任者、第二種電気工事士、危険物取扱者（乙・丙種）、日商ワープロ検定（1～3級）、パソコン検定（2～3級）、計算技術検定（1～4級）、情報技術検定（1～3級）、CG検定。</p>
<p><b>*工業化学科・・・</b></p> <p>〔1年〕普通教育（国語総合・地理A・数学Ⅰ・理科総合A・体育・保健・英語Ⅰ・家庭基礎） 工業科目（工業技術基礎・工業数理基礎・情報技術基礎・工業化学）普通19単位工業10単位</p> <p>〔2年〕普通教育（国語総合・世界史A・現代社会・数学Ⅱ・物理Ⅰ・体育・オーラルコミュニケーションⅠ） 工業科目（実習・工業化学）普通18単位工業11単位</p> <p>〔3年〕普通教育（現代文・現代社会・数学Ⅲ・数学A・体育・書道・英語Ⅱ） 工業科目（課題研究・実習・工業化学・地球環境化学）普通16単位工業13単位</p> <p>受験できる資格：計算技術検定（1～4級）、パソコン検定（2～3級）、情報技術検定（1～3級）、危険物取扱者（乙・丙種）、毒物劇物取扱者（ただし、卒業後）。</p>

も専門・専修学校進学率がとくに男子で若干低下し、短大・大学へ移行していることがわかる。

さらに、念のため地域内の高校の再編・配置について具体的にみておきたい。

ひとつの例として、表2は茨城県の県立高校の学区別課程別の設置状況をみたものである。地域による特性の差はあるものの、普通科と職業科の配分は、設置校数でおよそ8:2、生徒数で3:1となっている。茨城県の場合、県内に大手の製造企業が多数立地している地域があり、また東京大都市圏に隣接している部分では、商業などの雇用機会も比較的多いから、山形県などと比べた時に、職業課程の割合が重視されているかもしれない。しかし、全国的にこのような配分は妥当とみなされている。

最後に、現在の工業高校の教科教育の内容を具体的に確認しておく、高校の教育内容についてはいまま文部科学省の「高等学校学習指導要領」に示される大枠が基本的には踏襲されている。2003年度の新入生から順次実施された新指導要領では、教科は普通教育に関する教科と専門教育に関する教科に大別され、前者の教科に、国語、地理歴史、公民、数学、理科、保健体育、芸術、外国語、家庭、情報がある。後者には、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報、福祉、理数、体育、音楽、美術、英語がある。情報や福祉の教科が新たにもうけられたことが特徴的である。教科外の特別活動は、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事からなり、クラブ活動は特別活動としての位置づけではなくなった。そのほか、「総合的な学習の時間」がもうけられた。具体例として表3は、今回の調査対象である工業高校の現在のカリキュラム一覧である。

これをみると、工業高校でも3年間で普通教育科目と工業科目の単位数はどの科もおよそ6:4であり、インタビューした生徒の言葉を借り

れば「もっと工業の勉強中心だと思ったけど、入ってみたら普通の勉強の方が多かった」という印象を持つ生徒が多い。

工業高校の場合、在学中に工業に関係する公的資格を取得することを奨励しているし、実際いくつもの資格を取得する生徒も多い。例えば、電気科であれば、ボイラー技士、危険物取扱主任者乙種、第一種電気工事士、第二種電気工事士、デジタル・アナログ工事担任者、第三種電気主任技術者、基本情報技術者などが受験できる。これらのほとんどは高卒資格がなくても受験し取得できる資格であるが、工業高校の工業科目と連動しているので有利である<sup>(5)</sup>。具体例として、今回の調査対象であるA高校のカリキュラム一覧を表3に示してある。工業科目は1年10単位、2年11単位、3年13単位と増えていくが、普通科目の方が単位数は多い。

#### 4. 高校生調査の概要と集計結果の考察

今回の調査は、以上のような問題意識を背景に、現在工業高校に学ぶ高校生の進路観や学校生活への意識を把握するため、2003年9～10月に3つの工業系高校で生徒に記入してもらったアンケート調査である。調査は進路を考える時期にある2年生を対象に同一の調査票によって学校の協力を得て実施した。実施した高校の概要は以下の通りである。

\* A高校 茨城県H市にある県立工業高校・・1942年旧制中学として開校。県内で2番目に作られた工業高校である。設置クラスは工業系のみで機械科(全日制と定時制)、電気科、情報電子科、工業化学科(いずれも全日制)の4コース。生徒数585名(2003年度男子570名、女子15名)である。

\* B高校 茨城県H市にある工業専修学校・・H市に立地する大企業H製作所の創業者によって、1910年に設立された3年全日制高等専修学

表 4 卒業後の進路希望と日々の充実感

卒業後の進路希望	生き生きと充実している	どちらともいえない	あまり充実していない	合計
大学・短大	10 ( 14.5%)	8 ( 26.7%)	41 ( 25.5%)	59 ( 22.7%)
専門学校	22 ( 31.9%)	4 ( 13.3%)	49 ( 30.4%)	75 ( 28.8%)
就職	37 ( 53.6%)	18 ( 60.0%)	71 ( 44.1%)	126 ( 48.5%)
合計	69 (100.0%)	30 (100.0%)	161 (100.0%)	260 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値：7.499 自由度 4

校。戦前から企業が自社の職工養成学校として発展してきた歴史があり、全寮制で全員に月 8 万円の奨学金が支給され、卒業後はH製作所または関連企業に入社することが前提。広域通信制高校との連携教育で高校の卒業資格が得られる。電気科、電子科、機械科、溶接科の 4 学科があり、志願者は多く近年でも入試倍率は 6 ～ 9 倍ほどある。2003 年度の生徒数は 157 名（1 年 46 名、2 年 43 名、3 年 68 名）。

\* C 高校 山形県 S 市にある県立工業高校・・・設置クラスは工業系のみで機械科、電子機械科、電気科、情報技術科、土木科、科学技術科の 6 コース。なお、2005 年度から機械技術科、電子機械科、情報システム科、土木システム科、環境エネルギー科の 5 コース（各科定員 40 名）に改組の予定。生徒数は約 700 名（男子 680 名、女子 20 名）である。

以下ではそれぞれ A 高校、B 高校、C 高校と表記する。

調査票は、多岐にわたる 40 項目ほどの質問からなるが、大別すると卒業後の進路や将来観など、現在の学校生活について、メディアや情報への接触状況、家族や地域への評価などを聞いている。ここでは、それらを細かく述べる余裕がないので、学校別の集計結果は末尾の一覧表をみてもらうことにして、3 校の合計によって以下いくつか要点を述べるにとどめる。

表 4 は、「あなたは今毎日を生き生きと充実

していると感じるか」という質問と、卒業後の進路とのクロス表である。調査票にはこのような生徒自身の生活意識や意欲を問う質問がいくつか入れているが、ここで想定する仮説は現在の高校生活あるいは自己評価の満足感が高い生徒ほどまもなく直面する進路決定において、就職を選択・希望するのかどうか、にある。このクロス表からは充実していると答えた生徒の方が他より若干就職への選好が高いようにみえる。しかし、有意な相関というほどではない。むしろ、充実していると答えた生徒には大学・短大を選ぶ者が少ない傾向がある。

表 5 は、就職希望と答えた生徒について、充実感と就職の理由をクロスさせたものである。選択肢は 7 つで回答の偏りが大きい。第 1 位は「早く自分で稼ぎたい」（60.1%）、第 2 位が「ぜひやってみみたい仕事がある」（16.2%）、第 3 位が「学校の勉強はもう十分だ」（14.6%）であり、この 3 つで 90% を越えている。充実感の高い者ほど「やりたい仕事がある」が高く、充実感が低いものほど学校の勉強はもういい、という傾向がある程度みられる。ただ、「早く自分で稼ぎたい」と考えることと現在の充実とは関連がないが、別の質問「学校満足感」でも「早く稼ぎたい」とクロスすると「とても満足」（3 人、25%）、「まあ満足」（56 人、62.2%）、「不満足」（36 人、64.3%）となって、学校に満足していないと答えた方に「早く稼ぎたい」

後期中等教育における職業教育の現状と課題

表5 就職する理由×日々が充実しているか

	生き生きと充実している	どちらともいえない	あまり充実していない	合計
ぜひやってみみたい仕事あり	11 (26.2%)	2 (10.5%)	12 (12.4%)	25 (16.2%)
早く自分で稼ぎたい	26 (61.9%)	10 (52.6%)	59 (60.8%)	95 (60.1%)
いずれ家業を継ぐから	0	0	1 (1.0%)	1 (0.6%)
周囲からすすめられた	1 (2.4%)	0	4 (4.1%)	5 (3.2%)
学校の勉強はもう十分だ	3 (7.1%)	4 (21.1%)	16 (16.5%)	23 (14.6%)
他の土地に行きたい	0	3 (15.8%)	2 (2.1%)	5 (3.2%)
その他	1 (2.4%)	0	3 (3.1%)	4 (2.5%)
合計	42 (100.0%)	19 (100.0%)	97 (100.0%)	158 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値19.985 自由度12

表6 進学する理由×日々が充実しているか

	生き生きと充実している	どちらともいえない	あまり充実していない	合計
専門の勉強を深く学べる	12 (57.1%)	3 (33.3%)	38 (69.1%)	53 (62.4%)
希望の職業に就くため	6 (28.6%)	3 (33.3%)	8 (14.5%)	17 (20.0%)
楽しい学生生活を送る	2 (9.5%)	3 (33.3%)	6 (10.9%)	11 (12.9%)
周りの期待に応える	0	0	1 (1.8%)	1 (1.2%)
その他	1 (4.8%)	0	2 (3.6%)	3 (3.5%)
合計	21 (100.0%)	9 (100.0%)	55 (100.0%)	85 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値8.309 自由度8

(つまり就職したい?) 人が多い結果である。

表6は、進学希望者に進学の理由をきいた結果と充実感とのクロスである。こちらも「専門の勉強を深く学べる」(62.4%)、「希望の職業に就くため」(20%)、「楽しい学生生活を送る」(12.9%)の順で、充実感とはあまり相関していない。現在が充実感をもてない状況であるから、進学してもっと向上したいと考えるのか、あるいは進学して「希望の職業に就くため」とする生徒があまり多くないことから、職能技術を高校で身につけて卒業と同時に就職に繋げる可能性が展望できないから、むしろ進学を希望する可能性が考えられるのか、この数値だけで

はなんともいえない。

表7は、就職・進学希望を問わず全員に「将来就きたい職業のイメージはどんなものか」を選択肢から選んでもらう質問と充実感とのクロス表である。第1位は「身につけた技術や才能を生かした仕事」(44.2%)、第2位は「安定した生活が送れる仕事」(33.7%)で約8割である。この限りでは充実感の高い方に若干の「技術者指向」がみられるが、充実感の低い方が「安定指向」だといえるほどの結果ではない。

表8は、自分の将来像をどのようなものと考えているかを探るため、10年後の自分の夢と、実際に10年後の自分がなっているであろう現実

表7 希望する仕事のイメージ×日々が充実しているか

	生き生きと充実している	どちらともいえない	あまり充実していない	合計
身につけた技術や才能を生かした仕事	34 (49.3%)	9 (30.0%)	71 (44.7%)	114 (44.2%)
安定した生活が送れる仕事	20 (29.0%)	11 (36.7%)	56 (35.2%)	87 (33.7%)
人と接する仕事	3 (4.3%)	1 (3.3%)	9 (5.7%)	13 (5.0%)
ものを教える仕事	0	0	1 (0.6%)	1 (0.4%)
人のためになる仕事	5 (7.2%)	5 (16.7%)	8 (5.0%)	18 (7.0%)
その他	3 (4.3%)	1 (3.3%)	7 (4.4%)	11 (4.3%)
とくになし	4 (5.8%)	3 (10.0%)	7 (4.4%)	14 (5.4%)
合計	69 (100.0%)	30 (100.0%)	159 (100.0%)	258 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値9.861 自由度12

表8 自分の10年後の夢×自分の10年後の実際の子予想

	テレビに出る有名人になる	仕事で成功して金持ちになる	好きなことでその道の達人になる	気楽にのんびり好きな人と	合計
夢に向かって頑張っている	8 (44.4%)	15 (21.4%)	32 (34.8%)	8 (10.7%)	63 (24.7%)
安定した仕事・平凡な家庭で普通に	9 (50.0%)	35 (50.0%)	34 (37.0%)	43 (57.3%)	121 (47.5%)
まだ中途半端にぶらぶらしている	0	16 (22.9%)	20 (21.7%)	23 (30.7%)	77 (30.1%)
運悪く失敗しひどい目にあっている	1 (5.6%)	4 (5.7%)	6 (6.5%)	1 (1.3%)	12 (4.7%)
合計	18 (100.0%)	70 (100.0%)	92 (100.0%)	75 (100.0%)	255 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値25.426\*\* 自由度9

の予想をクロスさせたものである。かなり相関は高いのは当然かもしれない。あくまで仮定的想像であるから、「テレビに出る有名人になる」とか「仕事で成功して金持ちになる」といった夢が、実際には「安定した仕事・平凡な家庭で普通に過ごしている」ところに落ち着くだろうと思うのはむしろ堅実だともいえる。だが、「好きなことでその道の達人になる」と考え10年後も「夢に向かって頑張っている」と予想する生徒がかなりいることは、技術者・職人的技

能への信頼と展望をもっていると考えてもよい。

表9は、保護者の階層と卒業後の進路のクロスである。強い相関とはいえないが、ホワイトカラー層に大学・短大希望者が、ブルーカラー層に就職希望者が多い傾向はみられる。

ここで学校別に、進路希望と充実感の関係をみておきたい。図2は3つの学校別に構成比を示したもので実数の違いがあるので差が大きく見えているが、それぞれの特徴がわかる。A高校では、専門学校希望者に充実感の高いものが

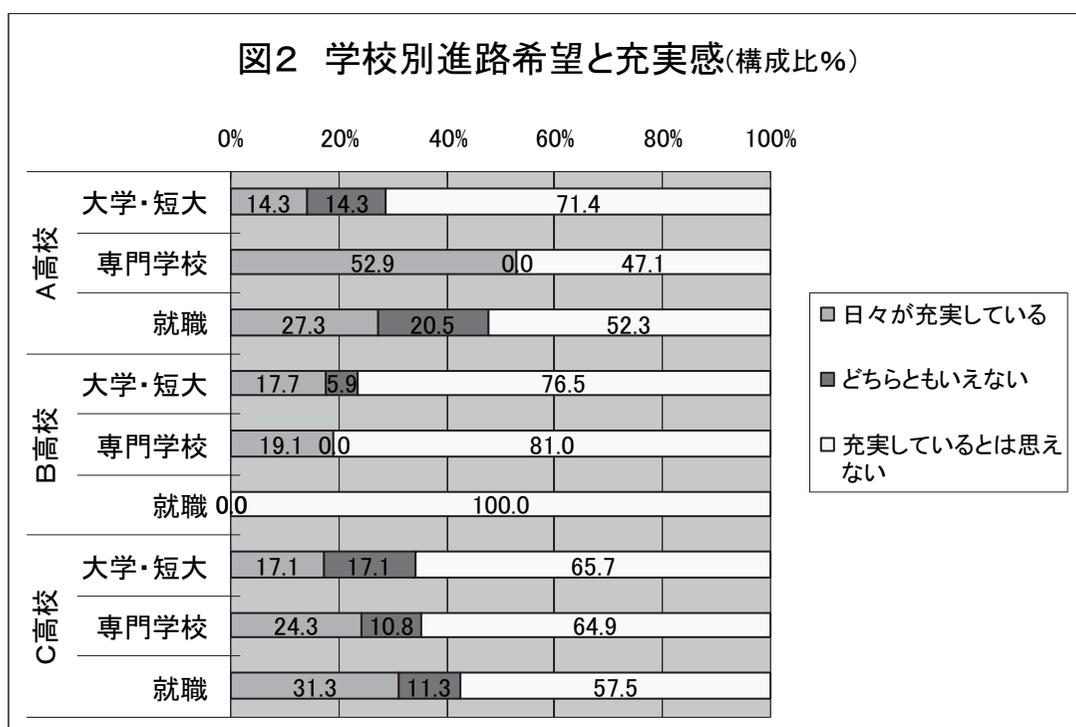
後期中等教育における職業教育の現状と課題

表9 卒業後の進路×保護者の階層

	大学・短大希望	専門学校希望	就職希望	合計
ホワイトカラー上層	16 ( 28.1%)	18 ( 25.0%)	21 ( 17.2%)	55 ( 21.9%)
ホワイトカラー下層	10 ( 17.5%)	15 ( 20.8%)	17 ( 13.9%)	42 ( 16.7%)
自営業層	12 ( 21.1%)	8 ( 11.1%)	25 ( 20.5%)	45 ( 17.9%)
ブルーカラー層	17 ( 29.8%)	25 ( 34.7%)	53 ( 43.4%)	95 ( 37.8%)
その他・無職	2 ( 3.5%)	6 ( 8.3%)	6 ( 4.9%)	14 ( 5.6%)
合 計	57 (100.0%)	72 (100.0%)	122 (100.0%)	251 (100.0%)

$\chi^2$ 乗値 10.147 自由度 8

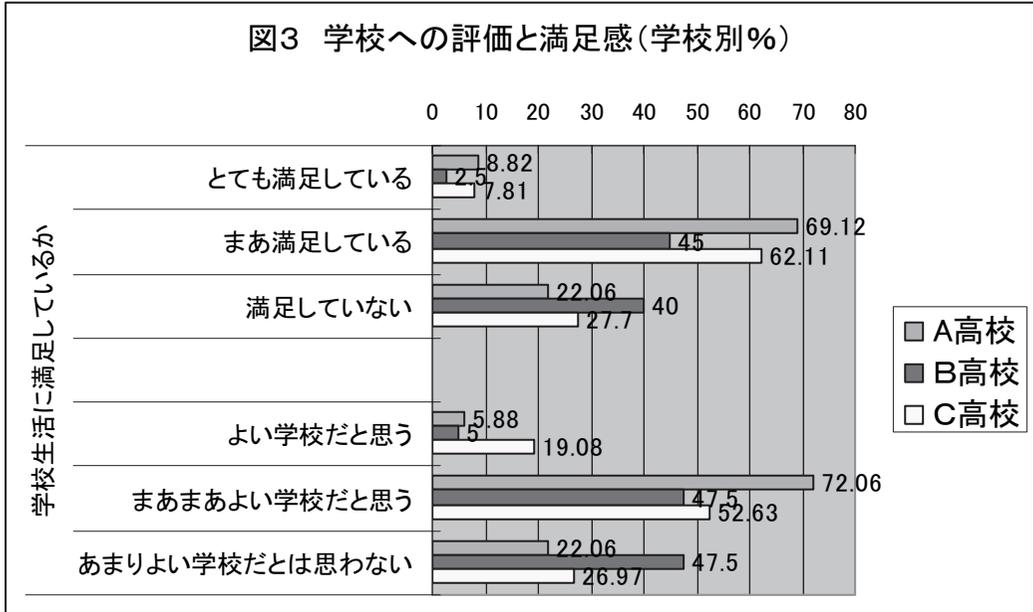
図2 学校別進路希望と充実感(構成比%)



多く (52.9%)、C高校では就職希望者にやや多い (31.3%) が、B高校では全体に充実感を感じる生徒が少ない (B高校の就職希望者は2名に過ぎないが) ということがわかる。AC高校と違ってB高校の場合、入学時点からH製作所という企業の技能者養成施設という性格により、卒業後直ちに企業への就職が前提とされているため、いわば進路選択は既になされているともいえるわけで、進学は就職後の未来に可能

性として選択されるものか、単なる願望という面がある。いずれにせよ、就職という道が必ずしも魅力的なものとして選択されていないこと、しかも大学・短大への進学という道も、現在に充実感を感じる生徒にとって必ずしも積極的に選択される道ではないらしい、という推測ができそうである。

最後に、現在の学校生活に満足しているかという質問と学校への評価を学校別に示した図3



をみてみたい。3校とも「とても満足」は極めて少なく、「まあ満足」が多いがB高校の「満足していない」(40%)が目立つ。また、自分の学校が「よい学校だと思う」と答えた者もきわめて少なく、多数は「まあまあよい学校」としているが、ここでもB高校の否定的評価が目立つ。これはどういうことを意味するのか、これだけではよくわからない。

### 5. おわりに

以上、われわれの行った高校生調査のデータをもとに現在の工業高校のもつ特徴や課題について述べた。本稿でのデータの分析はまだ第1段階で不十分なものであるから、これからさらに他の高校での調査データを追加しつつ、より精巧な分析を進めていく予定である。最後に、前段の高校教育の歴史的評価と問題設定で述べたことを再度整理して3点を提示し、調査結果との対応を簡単に述べておくことにする。

1) 進路選択における学歴の効果の問題・・10年ほど前まで卒業後の就職を既定の進路と考

えていた工業高校においては、望ましい就業機会の減少と専門学校等への進学選好の増加によって、就職を積極的に選択する生徒が減る傾向が強まったと考えられる。しかし、進学は学歴を得たい、あるいは専門技能や知識を得たいというような動機ではなく、むしろ職業選択へのモラトリアムとして選ぶ生徒がいる可能性がある。しかし、これは今回の分析では十分に確認はされていない。

2) 工業高校における職業教育と教養教育の問題・・職業資格と結びついた工業科目の教育は、卒業後の職業に直結すると考えられてきたが、平行して教えられてきた教養科目の教育は高等教育への進学のためのものではなかった。大学・短大への進学の多くは一般受験ではなくて、工業系大学の学校推薦枠に応じたものである。したがって1)の就職から進学、とくに専門学校への進学者増加(進学先の専門学校のコースは工業系以外のものがある)によって、工業科目が従来よりも職業教育としての性格を弱める可能性がある。

工業高校の教科において、技術革新の変化に対応する努力は常に払われてきたとも言えるが、汎用性のある技術が特定の職業と結びつかなければ生徒たちの未来を保証することができない。先端技術に関わる分野では、技術が陳腐化する速度も速いから、工業高校の教育水準はこれを追いかけていなければならないが、一方で生徒の学力低下を食い止め教養教育の基礎も固めなければならないから教師の負担は大きなものがある。進路指導が就職指導であった時代から、多様な進学を含む進路指導に変化する。しかし、それは工業高校の存在意義を再考させる。この点も、今回の調査データではあまり明らかにはできていない。

3) 高校生の生活満足感 QOL と職業への意欲の問題・われわれが考える「意欲格差社会」の想定する分岐点は、自分の能力評価と具体的な職業への就業チャンスが見えるかどうか、社会階層論的には、自分の出身階層からの上昇移動の可能性、少なくとも自分の両親の生活水準と社会的地位を維持し少しでも引き上げる場所を目指す展望にある。従来の「学歴社会」では、中卒、高卒、大卒という敷居をどこまで越えたかをひとつの目安と考える暗黙の言説が、人々を縛ってきたと言われることが多かった。そこには、単純一律な学力による選抜原理ではなく、普通科、職業科、あるいは地域の格差などがあまり顕在化しない形で組み込まれていた。高卒就職が安定的なシステムであった時代は、多くの生徒の満足感や意欲は良好な水準で維持され、卒業後の進路も見通せた。しかし、現在はその構造が変わってしまったと考えられる。

今回の調査結果で興味深いのは、学校別に見たとき一番具体的な職業に直結している（特定企業への就職を入学時から約束されている）はずのB高校が、学校満足感や充実感など生徒の意識項目において他の2校よりネガティブな結

果になっていることである。当初われわれが考えた仮説のひとつは、少子化の進行の中で教養教育（大学受験に向けた教科内容の教養教育）中心の普通科高校が生徒に十分な将来展望と意欲を与えることができなくなり（「ゆとり教育」が学力低下と結び付けて議論されるときに常套的説明になっている）、むしろ職業系、とくに具体的なものづくりや実習の体験学習が行われ、職業への展望も見つけやすい工業高校の方が、堅実で意欲的な生徒を育てる可能性があるのではないかと、いうものであった。しかし、B高校の示すデータからは、そうした積極的な評価は見出しにくい。これは何か別の要因があるのかもしれない、今後の検討が必要であるが、戦前からの企業内実業教育の系譜を引くB高校が、そこにいる生徒たちを職業世界に惹きつけられていないとすれば、われわれの課題にとっても重要な問題を投げかける。

【註】

- (1) 経済開発と学校教育の効率的な結合という近代化論の観点から、日本の学校教育がきわめて成功したモデルであるという評価は、欧米の日本研究者からまず提示された。とくに初等中等教育の成果は、学力水準の国際比較テストなどによって示され、一般化されて日本国民の学力への過度の自信を生み出したといえるだろう。この点はR・P・ドーア『学歴社会－新しい文明病』岩波書店などを参照。
- (2) 山田の「希望格差社会」は、もっぱら若年層の中の希望のもてない部分に焦点を絞って論じていて、1990年代前半までは若年層の大半が安定した正社員の雇用機会にありつけたかのような記述になっている。しかし、バブル崩壊以前の1980年代でも、同世代の4年制大学進学率は40%に達せず、安定した「終身雇用」に辿りつけたのは多数派ではなかった。
- (3) 名倉英三郎編著「日本教育史」八千代出版1984年、p.212。この部分の記述は、多くをこの本によっている。

- (4) 新制高校発足時の総合制原則とは、旧制度が普通教育において専門的指向がおろそかにされ、また実業教育において教養的側面が軽視されてきたことの反省に立って、教養教育とともに専門教育を積極的に普通教育のなかに取り入れ、普通教育と実業教育の対立の止揚を目指したことを言う。これは学校教育法における高等学校の目的（41条）にいう3つの目的の（2）「社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な技能に習熟させること」に根拠を置く職業学科の職業教育を導く理念であった。
- (5) 電気工事関係の資格を例にとれば、電気工事士二種（工業高校1年生習得レベルの電気知識）、電気工事士一種（工業高校2年生レベルの電気知識）まで取れば、日本全国どこへいっても受け持ち範囲内の電気設備工事をこなせるとみなされ、電気主任技術者試験三種（工業高校卒業レベルの電気知識）まで順調に取得できれば、建築会社などの社員となって受電設備の管理業務を行うことができる資格だ、と説明される。試験は、図面や写真鑑別（道具などの区別）、法規、総合実務などに分かれるが、一番苦勞するのが電気基礎理論であり数式を理解していないとできない計算問題である。

樋口美雄 + 財務省財務総合政策研究所「日本の所得格差と社会階層」日本評論社、2003年。  
R・P・ドーア「学歴社会－新しい文明病」松井弘道訳、岩波同時代ライブラリー、1990年。  
（原著 Ronald P. Dore. “The Diploma Disease”1976. George Allen & Unwin Ltd., London.）

#### 【参考文献】

- 菊池城司「近代日本の教育機会と社会階層」2003年、東京大学出版会。  
天野郁夫「教育改革のゆくえ－自由化と個性化を求めて」1995年、東京大学出版会。  
荻谷剛彦「階層化日本と教育危機－不平等再生産から意欲格差社会へ」2001年、有信堂。  
荻谷剛彦「学校・職業・選抜の社会学」1991年、東京大学出版会。  
中村高康・藤田武志・有田伸編著「学歴・選抜・学校の比較社会学」2002年、東洋館出版社。  
名倉英三郎編著「日本教育史」八千代出版1984年。  
中野育男「学校から職業への迷走－若年者雇用保障と職業教育・訓練」専修大学出版局。2002年。  
安田雪「働きたいのに・・・高校生就職難の社会構造」勁草書房、2001年。  
山田昌弘「希望格差社会」筑摩書房、2004年。

後期中等教育における職業教育の現状と課題

高校調査学校別集計

	A高校	B高校	C高校	合計
総数	68	40	152	260
居住形態				
父母と一緒に住む	44 (64.7)	7 (17.5)	67 (44.4)	118 (45.6)
父母の他祖父母とも	19 (27.9)	1 ( 2.5)	83 (55.0)	103 (39.8)
父母以外の親族	5 ( 7.4)	0	1 ( 0.7)	6 ( 2.3)
下宿など	0	1 ( 2.5)	0	1 ( 0.4)
寮・寄宿舎など	0	31 (77.5)	0	31 (12.0)
兄弟姉妹関係				
一番上	23 (33.8)	13 (32.5)	56 (36.8)	92 (35.4)
真ん中	12 (17.6)	8 (20.0)	32 (21.1)	52 (20.0)
末っ子	33 (48.5)	16 (40.0)	58 (38.2)	107 (41.2)
一人っ子	0	3 ( 7.5)	6 ( 3.9)	9 ( 3.5)
保護者の職業				
農林漁業	0	0	15 (10.3)	15 ( 6.0)
商工自営業	11 (16.7)	2 ( 5.0)	17 (11.7)	30 (12.0)
経営管理職	6 ( 9.1)	8 (20.0)	10 ( 6.9)	24 ( 9.6)
専門職	2 ( 3.0)	1 ( 2.5)	9 ( 6.2)	12 ( 4.8)
事務職	6 ( 9.1)	3 ( 7.5)	15 (10.3)	24 ( 9.6)
販売職	3 ( 4.5)	1 ( 2.5)	14 ( 9.7)	18 ( 7.2)
労務職	27 (40.9)	23 (57.5)	43 (29.7)	93 (37.1)
保安・警備職	1 ( 1.5)	0	1 ( 0.7)	2 ( 0.8)
公務員	5 ( 7.6)	2 ( 5.0)	12 ( 8.3)	19 ( 7.6)
その他	5 ( 7.6)	0	8 ( 5.5)	13 ( 5.2)
無職	0	0	1 ( 0.7)	1 ( 0.4)
卒業後の進路				
4年制大学	7 (10.3)	10 (25.0)	23 (15.1)	40 (15.4)
短期大学	0	7 (17.5)	12 ( 7.9)	19 ( 7.3)
専門学校	14 (20.6)	21 (52.5)	30 (19.7)	65 (25.0)
就職	44 (64.7)	2 ( 5.0)	80 (52.6)	126 (48.5)
その他	3 ( 4.4)	0	7 ( 4.6)	10 ( 3.8)
進学理由				
専門を深く	14 (20.6)	—	39 (25.7)	53 (24.1)
希望の職に就くため	4 ( 5.9)	—	13 ( 8.9)	17 ( 7.7)
楽しい学生生活	2 ( 2.9)	—	9 ( 5.9)	11 ( 5.0)
期待に応える	1 ( 1.5)	—	0	1 ( 0.5)
その他	0	—	3 ( 2.0)	1 ( 0.5)
非該当 (就職希望者)	47 (69.1)	—	88 (57.9)	135 (61.4)
進学地				
首都圏	9 (13.2)	—	20 (13.2)	29 (13.2)
関西圏	0	—	3 ( 2.0)	3 ( 1.4)
地方中核都市圏	0	—	28 (18.4)	28 (12.7)
自宅から通える	10 (14.7)	—	2 ( 1.3)	12 ( 5.5)
その他	0	—	6 ( 3.9)	6 ( 2.7)
非該当 (就職希望者)	49 (72.1)	—	87 (57.2)	8 ( 3.6)
就職する理由				
ぜひやってみたい仕事がある	4 ( 9.5)	8 (20.0)	13 (17.1)	25 (15.8)
早く自分で稼ぎたい	27 (64.3)	28 (70.0)	40 (52.6)	95 (60.1)
いずれ家業を継ぐから	0	0	1 ( 1.3)	1 ( 0.6)
周囲からすすめられた	1 ( 2.4)	0	4 ( 5.3)	5 ( 3.2)

研究所年報 35 号

	A 高校	B 高校	C 高校	合計
総数	68	40	152	260
学校で勉強はもう十分	8 (19.0)	4 (10.0)	11 (14.5)	23 (14.6)
他の土地に行きたい	2 ( 4.8)	0	3 ( 3.9)	5 ( 3.2)
その他	0	0	4 ( 5.3)	4 ( 2.5)
就職希望地				
東京など首都圏	4 ( 9.3)	10 (25.0)	20 (26.0)	34 (21.3)
大阪など関西圏	1 ( 2.3)	3 ( 7.5)	6 ( 7.8)	10 ( 6.3)
仙台など地方中核都市	0	1 ( 2.5)	2 ( 2.6)	3 ( 1.9)
自宅から通えるところ	28 (65.1)	24 (60.0)	39 (50.6)	91 (56.9)
その他	10 (23.3)	2 ( 5.0)	10 (13.0)	22 (13.8)
希望する仕事のイメージ				
身につけた技術や才能を生かした仕事	34 (50.0)	16 (41.0)	64 (42.4)	114 (44.2)
安定した生活が送れる仕事	21 (30.9)	19 (48.7)	47 (31.1)	87 (33.7)
人と接する仕事	5 ( 7.4)	1 ( 2.6)	7 ( 4.6)	13 ( 5.0)
ものを教える仕事	0	0	1 ( 0.7)	1 ( 0.4)
人のためになる仕事	4 ( 5.9)	1 ( 2.6)	13 ( 8.6)	18 ( 7.0)
その他	2 ( 2.9)	0	9 ( 6.0)	11 ( 4.3)
とくになし	2 ( 2.9)	2 ( 5.1)	10 ( 6.6)	14 ( 5.4)
学校生活に満足しているか				
とても満足している	6 ( 8.8)	1 ( 2.5)	13 ( 8.8)	20 ( 7.8)
まあ満足している	47 (69.1)	18 (45.0)	94 (63.5)	159 (62.1)
満足していない	15 (22.1)	21 (52.5)	41 (27.7)	77 (30.1)
学校に要望したいこと				
課外活動に力を入れて	5 ( 7.5)	7 (17.5)	23 (15.3)	35 (13.6)
面白い授業を増やして	32 (47.8)	16 (40.0)	51 (34.0)	99 (38.5)
食堂等施設を充実して	14 (20.9)	9 (22.5)	30 (20.0)	53 (20.6)
もっと進学就職指導を	2 ( 3.0)	0	9 ( 6.0)	11 ( 4.3)
校則を変えてほしい	7 (10.4)	8 (20.0)	10 ( 6.7)	25 ( 9.7)
とくに望むことはない	7 (10.4)	0	22 (14.7)	29 (11.3)
その他	0	0	5 ( 3.3)	5 ( 1.9)
学校が気に入っているか				
よい学校だと思う	4 ( 5.9)	2 ( 5.0)	29 (19.3)	35 (13.6)
まあまあよい学校だと思う	49 (72.1)	19 (47.5)	80 (53.3)	148 (57.4)
あまりよい学校だと思わない	15 (22.1)	19 (47.5)	41 (27.3)	75 (29.1)
学校の良いところ				
役に立つ勉強ができる	22 (32.4)	3 ( 7.5)	55 (36.7)	80 (31.0)
よい先生がいる	3 ( 4.4)	0	9 ( 6.0)	12 ( 4.7)
よい友達がいる	23 (33.8)	3 ( 7.5)	37 (24.7)	63 (24.4)
部活など面白いことができる	4 ( 5.9)	1 ( 2.5)	16 (10.7)	21 ( 8.1)
環境や雰囲気がよい	3 ( 4.4)	0	10 ( 6.7)	13 ( 5.0)
安定した就職に直結	10 (14.7)	18 (45.0)	22 (14.7)	50 (19.4)
費用がかからず奨学金あり	3 ( 4.4)	15 (37.5)	1 ( 0.7)	19 ( 7.4)
学校のいやなところ				
授業がつまらない	25 (36.8)	12 (30.0)	40 (26.7)	77 (29.8)
いやな先生がいる	15 (22.1)	12 (30.0)	34 (22.7)	61 (23.6)
いやな生徒がいる	9 (13.2)	0	9 ( 6.0)	18 ( 7.0)
自分のやりたいことができない	4 ( 5.9)	8 (20.0)	13 ( 8.7)	25 ( 9.7)
環境や雰囲気がよくない	8 (11.8)	6 (15.0)	31 (20.7)	45 (17.4)
いやなところはない	4 ( 5.9)	2 ( 5.0)	15 (10.0)	21 ( 8.1)

後期中等教育における職業教育の現状と課題

	A高校	B高校	C高校	合計
総数	68	40	152	260
その他	3 ( 4.4)	0	8 ( 5.3)	11 ( 4.3)
週末の過ごし方				
自宅で学習	0	0	3 ( 2.0)	3 ( 1.2)
部活動	29 (42.6)	27 (67.5)	44 (29.3)	100 (38.8)
勉強・資格試験など	0	0	1 ( 0.7)	1 ( 0.4)
趣味・お稽古	6 ( 8.8)	2 ( 5.0)	15 (10.0)	23 ( 8.9)
ボランティア活動	1 ( 1.5)	0	3 ( 2.0)	4 ( 1.6)
TV・TVゲーム・友達と遊ぶ	16 (23.5)	11 (27.5)	66 (44.0)	93 (36.0)
アルバイト	13 (19.1)	0	5 ( 3.3)	18 ( 7.0)
家族と過ごす・手伝い	0	0	4 ( 2.7)	4 ( 1.6)
その他	3 ( 4.4)	0	9 ( 6.0)	12 ( 4.7)
放課後の過ごし方				
すぐに帰宅	18 (26.5)	0	49 (32.2)	67 (25.8)
部活動	33 (48.5)	39 (97.5)	85 (55.9)	157 (60.4)
塾・予備校	0	1 ( 2.5)	0	1 ( 0.4)
友人と遊ぶ	12 (17.6)	0	3 ( 2.0)	15 ( 5.8)
その他	5 ( 7.4)	0	15 ( 9.8)	20 ( 7.7)
アルバイト				
定期的に行っている	18 (26.9)	—	22 (14.5)	40 (18.3)
不定期に行っている	15 (22.4)	—	17 (11.2)	32 (14.6)
していない	34 (50.7)	—	113 (74.3)	137 (67.1)
アルバイト内容				
ファーストフード店員	4 ( 6.0)	—	3 ( 2.0)	7 ( 3.2)
レストランや喫茶店員	4 ( 6.0)	—	3 ( 2.0)	7 ( 3.2)
販売	8 (11.9)	—	7 ( 4.6)	15 ( 6.8)
事務	0	—	2 ( 1.3)	2 ( 0.9)
工場や倉庫作業	1 ( 1.5)	—	4 ( 2.6)	5 ( 2.3)
家業の手伝い	0	—	3 ( 2.0)	3 ( 1.4)
その他	15 (22.4)	—	17 (11.2)	32 (14.6)
非該当 (バイトせず)	35 (52.2)	—	113 (74.3)	148 (67.6)
アルバイト日数 (週)				
1日	1 ( 1.5)	—	2 ( 1.3)	3 ( 1.4)
2-3日	6 ( 9.1)	—	8 ( 5.3)	14 ( 6.5)
4-5日	17 (25.8)	—	15 (10.0)	32 (14.8)
6-7日	8 (12.1)	—	12 ( 8.0)	20 ( 9.3)
非該当 (バイトせず)	34 (51.5)	—	113 (75.3)	147 (68.1)
アルバイトの魅力				
友達が増える	1 ( 1.5)	—	1 ( 0.7)	2 ( 0.9)
学校以外の知りあいができる	2 ( 3.0)	—	2 ( 1.3)	4 ( 1.8)
金が稼げる	16 (24.2)	—	18 (11.8)	34 (15.6)
人と接するのが楽しい	1 ( 1.5)	—	2 ( 1.3)	3 ( 1.4)
社会勉強	6 ( 9.1)	—	8 ( 5.3)	14 ( 6.4)
貯金ができる	5 ( 7.6)	—	5 ( 3.3)	10 ( 4.6)
その他	1 ( 1.5)	—	3 ( 2.0)	4 ( 1.8)
非該当 (バイトせず)	34 (51.5)	—	113 (74.3)	147 (67.4)
アルバイト収入				
5000円以下	0	—	4 ( 2.6)	4 ( 1.8)
5000-1万円未満	0	—	1 ( 0.7)	1 ( 0.5)
1-2万円未満	3 ( 4.5)	—	2 ( 1.3)	5 ( 2.3)

研究所年報 35 号

	A 高校	B 高校	C 高校	合計
総数	68	40	152	260
2-3万円未満	5 ( 7.5)	-	5 ( 3.3)	10 ( 4.6)
3-4万円未満	8 (11.9)	-	16 (10.5)	24 (11.0)
4万円以上	17 (25.4)	-	11 ( 7.2)	28 (12.8)
非該当 (バイトせず)	34 (50.7)	-	113 (74.3)	147 (67.1)
アルバイトはどこで見つけたか				
友達の紹介	15 (22.4)	-	12 ( 7.9)	27 (12.3)
親の紹介	2 ( 3.0)	-	13 ( 8.6)	15 ( 6.8)
求人情報	7 (10.4)	-	0	7 ( 3.2)
その他	9 (13.4)	-	14 ( 9.2)	23 (10.5)
非該当 (バイトせず)	34 (50.7)	-	113 (74.3)	147 (67.1)
月の小遣い				
1000円未満	1 ( 1.5)	0	1 ( 0.7)	2 ( 0.8)
1000-4000円未満	4 ( 5.9)	0	23 (15.4)	27 (10.5)
4000-7000円未満	21 (30.9)	2 ( 5.0)	81 (54.4)	104 (40.5)
7000-1万円未満	10 (14.7)	2 ( 5.0)	10 ( 6.7)	22 ( 8.6)
1-1万5000円未満	8 (11.8)	18 (45.0)	8 ( 5.4)	34 (13.2)
1万5000円-2万円未満	1 ( 1.5)	2 ( 5.0)	0	3 ( 1.2)
2万円以上	0	7 (17.5)	0	7 ( 2.7)
もらっていない	23 (33.8)	9 (22.5)	26 (17.4)	58 (22.6)
学校以外で楽しいこと				
好きな勉強	2 ( 2.9)	1 ( 2.6)	6 ( 4.1)	9 ( 3.6)
アルバイト	5 ( 7.4)	0	4 ( 2.7)	9 ( 3.6)
家族とのやりとり	0	1 ( 2.6)	8 ( 5.5)	9 ( 3.6)
友達づきあい	35 (51.5)	25 (65.8)	63 (43.2)	123 (48.8)
彼女・彼とのつきあい	12 (17.6)	6 (15.8)	10 ( 6.8)	28 (11.1)
習い事	0	0	1 ( 0.7)	1 ( 0.4)
ギャンブル	3 ( 4.4)	1 ( 2.6)	9 ( 6.2)	13 ( 5.2)
その他	11 (16.2)	4 (10.5)	45 (30.8)	60 (23.8)
携帯電話				
携帯電話をもっている	67 (98.5)	37 (92.5)	142 (93.4)	236 (94.6)
P H Sをもっている	0	0	1 ( 0.7)	1 ( 0.4)
どちらももっていない	1 ( 1.5)	3 ( 7.5)	9 ( 5.9)	13 ( 5.0)
一日のTV視聴時間				
テレビは見ない	2 ( 2.9)	3 ( 7.5)	3 ( 2.0)	8 ( 3.1)
1時間以下	8 (11.8)	24 (60.0)	9 ( 5.9)	41 (15.8)
1-3時間未満	32 (47.1)	11 (27.5)	67 (44.1)	110 (42.3)
3-5時間未満	19 (27.9)	2 ( 5.0)	47 (30.9)	68 (26.2)
毎日5時間以上	7 (10.3)	0	26 (17.1)	33 (12.7)
よく本を買うか				
はい	24 (35.3)	17 (42.5)	76 (50.3)	117 (45.2)
いいえ	44 (64.7)	23 (57.5)	75 (49.7)	142 (54.8)
今充実し生き生き輝く生活か				
とてもそう思う	2 ( 3.0)	0	8 ( 5.6)	10 ( 4.0)
まあそう思う	20 (29.9)	7 (17.5)	32 (22.2)	59 (23.5)
あまり思わない	27 (40.3)	18 (45.0)	67 (46.5)	112 (44.6)
まったく思わない	9 (13.4)	14 (35.0)	26 (18.1)	49 (19.5)
よくわからない	9 (13.4)	1 ( 2.5)	11 ( 7.6)	21 ( 8.4)
10年後の夢				
テレビに出る有名人になる	5 ( 7.6)	2 ( 5.0)	11 ( 7.3)	18 ( 7.0)

後期中等教育における職業教育の現状と課題

	A高校	B高校	C高校	合計
総数	68	40	152	260
仕事で成功して金持ちになる	13 (19.7)	16 (40.0)	41 (27.2)	70 (27.2)
好きなことでその道の達人になる	23 (34.8)	13 (32.5)	57 (37.7)	93 (36.2)
気楽にのんびり好きな人と暮らす	25 (37.9)	9 (22.5)	42 (27.8)	76 (29.6)
10年後の実際の予想				
夢に向って頑張っている	15 (22.1)	11 (27.5)	38 (25.3)	64 (24.8)
安定した仕事・平凡な家庭で普通に	40 (58.8)	19 (47.5)	63 (42.0)	122 (47.3)
まだ中途半端にぶらぶら	13 (19.1)	9 (22.5)	37 (24.7)	59 (22.9)
運悪く失敗してひどい目にあっている	13 (19.1)	9 (22.5)	37 (24.7)	59 (22.9)
この市が好きか				
とても好き	10 (14.9)	1 ( 2.5)	36 (23.7)	47 (18.1)
どちらかといえば好き	41 (61.2)	14 (35.0)	71 (46.7)	126 (48.6)
どちらかといえば嫌い	12 (17.9)	19 (47.5)	23 (15.1)	54 (20.8)
嫌い	4 ( 6.0)	6 (15.0)	22 (14.5)	32 (12.4)
この市に住み続けたいか				
住み続ける	8 (12.3)	3 ( 7.5)	26 (17.2)	37 (14.5)
住みたいが他へ行くだろう	23 (35.4)	7 (17.5)	35 (23.2)	65 (25.8)
他へ行くが戻ってきたい	16 (24.6)	2 ( 5.0)	48 (31.8)	66 (25.8)
他へ行きたい	18 (27.7)	28 (70.0)	42 (27.8)	88 (34.4)
母親はどんな存在か				
人間として尊敬・信頼できる人	7 (10.3)	12 (30.0)	31 (20.4)	50 (19.2)
何でも相談する仲の良い友人	6 ( 8.8)	2 ( 5.0)	13 ( 8.6)	21 ( 8.1)
自分の生活を支えてくれる人	45 (66.2)	25 (62.5)	90 (59.2)	160 (61.5)
お互いに関心のない同居人	1 ( 1.5)	1 ( 2.5)	2 ( 1.3)	4 ( 1.5)
干渉し邪魔をするうっとおしい人	4 ( 5.9)	0	9 ( 5.9)	13 ( 5.0)
その他	5 ( 7.4)	0	7 ( 4.6)	12 ( 4.6)
父親はどんな存在か				
人間として尊敬・信頼できる人	9 (13.2)	20 (50.0)	46 (30.7)	75 (29.1)
何でも相談する仲の良い友人	2 ( 2.9)	5 (12.5)	7 ( 4.7)	14 ( 5.4)
自分の生活を支えてくれる人	43 (63.2)	10 (25.0)	69 (46.0)	122 (47.3)
お互いに関心のない同居人	5 ( 7.4)	2 ( 5.0)	10 ( 6.7)	17 ( 6.6)
干渉し邪魔をするうっとおしい人	5 ( 7.4)	2 ( 5.0)	10 ( 6.7)	17 ( 6.6)
その他	4 ( 5.9)	1 ( 2.5)	8 ( 5.3)	13 ( 5.0)
親しい異性はいるか				
いる (いた)	37 (54.4)	20 (50.0)	58 (39.2)	115 (44.9)
いない	31 (45.6)	20 (50.0)	90 (60.8)	141 (55.1)
将来結婚したいか				
結婚はしてみたい	60 (88.2)	38 (95.0)	112 (75.7)	210 (82.0)
したくない	6 ( 8.8)	2 ( 5.0)	24 (16.2)	32 (12.5)
その他	2 ( 2.9)	0	12 ( 8.1)	148 ( 5.5)
自分の子供が1人はほしいか				
ほしいと思う	54 (79.4)	32 (80.0)	96 (65.3)	182 (71.4)
今は思わないがいずれ思う	9 (13.2)	6 (15.0)	33 (22.4)	48 (18.8)
ほしいと思わない	5 ( 7.4)	2 ( 5.0)	18 (12.2)	25 ( 9.8)

質問項目によっては無回答を欠損値としているため、合計が総数と一致しない場合がある。